

2024年2月21日

2023年4月 Nr. 506

さて、今回は「スイスを美しく保つために働いている外国人労働者」が話題になっています。そして、放送番組の記者であるグリューターさん（Frau Grüter）が各方面で活動している彼らの業務に同行取材し、それをレポートしています。

スイスは世界で最も清潔な国々の一つとして見なされているだけではなく、グリューターさんは、スイスが実際にそういう国だと思っています。スイスは、しかしながら、最大のゴミ排出国の一つでもあります。多くのゴミは、市の清掃員がやって来て、これを収集するまでは家の外に放置されたままになっています。バーゼル市の清掃員では、男性の方が女性よりずっと多く働いています。これらの女性職員の内の一人は、彼女の当時の夫が市の清掃員であったため、自らもキューバからスイスにやって来ました。当時の夫はバーゼル市清掃局で働いていたのですが、彼女も当時、そこですぐ職を得ました。キューバからやって来たその女性は、スイスでは最早いらなくなったものは、すべて路上に捨てたり、路上に置いたりすることに驚きました。

キューバでは買いものができるものがあまり多くないので、その分ゴミも少ないです。それは一方ではよいことだと彼女は思いますが、しかしながら他方ではキューバにおいては多くのものを買えないことに当然ながら腹を立ててもいました。

ある土曜日の午前中、彼女は仕事に際しグリューターさんに同行してもらいます。市清掃局の仕事は土曜日にも6時45分に始まります。この土曜日には太陽がまだ昇っていません。彼らは細長いごみ収集車で狭い通りを走り、満杯になったごみ袋をごみ箱から取り出し、新しいごみ袋を備えつけます。その作業のために数メートル毎にごみ収集車から降り、またごみ収集車へ乗ることを繰り返します。

そのキューバ出身の女性は、この仕事を11年来行っており、降車と乗車を繰り返すことには慣れていますが、グリューターさんはこの降車と乗車をずっと繰り返すことだけで2時間後には疲れてしまいます。土曜日のシフトは5時間足らずですが、そのときは休憩なくぶっ通しで働きます。キューバ人の女性と彼女の男性同僚はその間、時々ちょっと水を飲むだけです。そのような男性と一緒に働くことは、彼女は気に入っています。彼女は一般に男性は複雑だと思っています。しかしながら、それには慣れました。彼女は自分自身も複雑だときどき思うことがあります。

時々ちょっと問題が起きますが、どうにか常に乗り越えられていますし、このことはすば

らしいと思います。しかしながら、女性として彼女にはこれは簡単なことではありません。バーゼル市清掃局には、男性が言うことを女性が行わなければならないというお国柄の国から来ている男性が多く働いているからです。そのため、ここでは彼女に対し何も言う権利の無い人々が、彼女が何をすべきか指示しようとすることがあります。もっとも、これは職員が市から賃金が支払われる業務です・・・。

アリ (Ali) さんというのは、廃棄物検査官のファーストネームです。その仕事をここ半年来彼は行っています。ドイツ語がまだ十分には身につけていませんので、正規雇用されていません。バーゼルでは外国人が廃棄物検査業務において正規雇用されることを希望する場合、ドイツ語の試験に合格しなければなりません。従って、アリさんは業務の後ドイツ語を学んでいます。

グリューターさんはアリさんの業務に同行します。古くなったフィットネス器具とか、壊れた電子レンジを廃棄しようとする人は、その廃棄費用を払わなければなりません。しかしながら、そのようなものをただ歩道に放置する人がいます。それにもかかわらず廃棄物検査官はそれを気にかけることはありません。そのようなものが誰のものだったかを突き止めることはほとんど不可能だからです。検査官がより興味を持つのは、費用が支払われていなかったごみ袋です。これらをアリさんはごみ収集車の荷台に投げ入れます。後でゴミ袋の中身をよくチェックするためです。時折、例えば、受取人の住所が記載された封筒を見つけることがあります。その人がその近くに住んでいる場合、そこでゴミを不法投棄したのはその人であることがかなり確実になります。そうした後で彼が罰金として支払わなければならないこの 200 フランは、罰として見なされていず、彼が行ってしまった行為に対する後悔の印にすぎません。

グリューターさんがアリさんの業務に同行している間、多くのことは起きませんが、彼らは一人の男性が目にとまります。彼はパン屋に入る前に、今しがた歩きタバコをしていたタバコの切れ端を路上に投げ捨てたのです。アリさんが直後に彼に話しかけると、彼はバツが悪そうな表情をします。最初は、彼は、それは自分の吸い殻ではないと言い張ります。しかしながら、その後で謝ります。そして、彼は、そんなことを二度としないように、携帯用の灰皿をもらいます・・・。

さて、課題ではスイス・バーゼル市において清掃局職員や廃棄物検査官として働く外国人労働者が取り上げられていますが、テキストではこの他に掃除婦として働く外国人も登場します。ここで驚くのは、2 人の子供を持つ共働きの夫妻であるスイス人らしき依頼人が、留守中に家の掃除をしてもらうのですが、外国人であるその掃除婦さんに鍵を預けていることです。それほど掃除婦さんを信頼していることに驚きました。ではこれが例外なのか

と言え、どうもそうではないようです。というのは 61 歳の男性の掃除人に掃除を依頼している女性も同様に鍵を預けている事例が紹介されているからです。この女性の場合、セルビア生まれの 61 歳のセルジム (Seljim) さんに 5 年前から家の掃除を依頼し、月に一度、第 2 火曜日に来てもらっているといいます。彼は驚いたことに 14 軒もの家庭の清掃を担当しています。彼は契約・担当しているすべての家庭の鍵を預かっているのでしょうか。このように家事代行を依頼する場合において、業者に鍵を預けることはバーゼル市では一般的なのでしょうか。セキュリティ上問題はないのだろうかと思ってしまうます。もっとも、留守中に清掃などの家事を代行してもらうためにはドアを開けるための鍵が必要ですので、預けざるをえないと思いますが、当然何らかの対策が講じられているものと想像します。私にはちょっと考えられませんが・・・。

不法滞在の発覚に不安を感じながらも清掃業務に従事するスベトラーナさん(仮名)という女性。彼女は 10 年来掃除婦として働いていますが、取材したグリューターさんは彼女の出身地も明かせないそうです。

今回の放送・課題を通じて、バーゼル市およびスイスが清潔に保たれているのは外国人労働者のおかげかもしれないと改めて思いました。また、以前ゲーテでドイツの外国人労働者の問題を扱った授業の際にも同じようなことを痛感したことがあることを思い出しました。また、2022 年 8 月に放送された時点ではアリさんのドイツ語の能力がまだ十分でないため正規雇用されていないということでしたが、仕事の後でドイツ語の勉強をしていたようですので、現在は晴れて正規雇用されているだろうと思います。

K. K.

2023 年 7 月 27 日

2023 年 7 月 Nr. 507

さて、今回は「ドイツの訪問看護師」が話題になっています。

16 年前、私たちは公的機関で働いている自治体の看護師についてのラジオ放送番組を扱いました。今回の放送番組では 30 年前に自ら私営の介護サービス会社 („Pflege Zuhause Christiane Weyrosta“) を設立した看護師が話題になっています。その看護師は、この放送番組の記者の母親です。彼女が病院での職業教育を受けて以来既に 40 年が経ちました。病院では当時、彼女はまだ自分自身で患者たちの体を洗い、食事の配膳をしていましたので、包帯や注射を気にかけるだけではありませんでした。現在では病院において、特別な職業教育を必要としないすべての業務については看護助手に委託されています。彼女はこれは悲しいと思います。

介護サービスの費用は、一部は健康保険から、一部は介護保険からまたは患者自身から受け取ります。健康保険を利用するためには介護サービス会社はホームドクターから指示書を入手します。その指示書には介護サービス従事者が患者のために何をすべきかが記載されています。例えば、患者に包帯をしたり、その包帯を交換したり、患者に弾性ストッキングを装着させるかなどが記載されています。弾性ストッキングは患者の足に日中水分が少なく流れるように助けたり、また座ったり、立ったり、歩行したりする際にその負担により腫れないように助けたりするものです。

2 月末のある水曜日の早朝、記者は母親の早番勤務に同行します。母親は車で、例えば、クラウトハイム (Krautheim) の集落の一部であるクレプスアウ (Klepsau) の患者 12 人を訪問します。この地域の人口は 5,000 人を下回り、バーデン・ヴュルテンベルク州のホーエンローエ郡に属します。その郡庁所在都市であるキュンツェルスアウ (Künzelsau) は、州都シュトゥットガルトの北西方向 70 キロメートル離れた地点の南西ドイツに位置します。

早番勤務は、朝 6 時に始まります。その時は、空はまだ青みを帯びた黒色ですし、既に明かりがともっている家は本当にまばらにしかありません。母親はここ 30 年以上、4 時半に起きています。その時間には息子である記者が目覚ましていることはまれです。しかしながら、この朝には彼は早起きをし、6 時には母親について車に乗り込みます。二三分後には既に大きな一戸建て住宅の車庫の入り口前に止まります。その住宅には家族が住んでいるだけでなく、1 階には一人の高齢の女性も住んでいます。彼女は薄暗い部屋で高さ調整可

能な介護用ベッドに横になっており、まだ半分眠っています。部屋の壁には何枚もの家族写真の隣にイエス像とキリストの十字架像が共にいくつか掛かっています。

記者の母親は、患者たちに対し自分のファーストネームを名乗ります。母親はクリスティアーネ (Christiane)、同行の息子はヨナス (Jonas) という名です。その高齢女性がまだ完全には目覚めてはいませんので、母親は高齢女性にまず自分の名前を言うとともに、彼女に弾性ストッキングを装着させるために、また彼女に薬を投与するために来訪したことを告げます。母親はそこから立ち去る前に、キッチンで手の消毒をしている間、その 80 過ぎの女性がまだ少し眠れるように、また明かりを消します。彼女は患者ファイルに手短かに「すべて異常なし」とメモ書きをします。これら一連の作業はここではすべてで 15 分しかかけられません。次の患者がもう待っているからです。

巡回介護サービスにおいては、彼女が何年間も世話をする患者もいます。そのようなことは病院では起きません。従って、彼女は 1994 年に独立しました。息子は、実に頻繁に家の電話が晩遅くだったり、夜だだだに鳴っていたことや、そうした後には両親の寝室から急ぐ足音が聞こえてきたりしたことを今でも思い出します。それは大抵、患者がベッドからまたちょっと落ちたとか、トイレで助けが必要になったからでした。そうした時には、彼女は夜でも、患者を助けるためにすぐ車に乗り込みました。

介護サービス事業の責任者として、患者の幸せのためにすべてに対して責任を果たしてきました。しかしながら、従業員に対してもそうでした。また、誰かが辞めた時に、常に新たな労働力を見つけることに対しても責任を負っていました。それにもかかわらず、彼女はずっと続けてやってきました。そして、ようやく 2 年前に後継者を探しました。彼女は介護サービス事業の経営・管理をヘルマンさん (Herr Hermann) に引き渡しました。そして、ヘルマンさんは、彼女が以前立ち上げ、運営していた会社において、今や彼女の上司となっています……。

さて、訪問看護師として現場で働く自分の母親クリスティアーネさんに同行し、記者である息子のヨナスさんがレポートしています (息子の同行については当然、訪問予定先には事前の了承をもらっているとのことです)。今回の同行取材が行われたのが、2022 年 2 月末の早朝でしたが、2 月末といえば、冬が徐々に終わりに向かっている頃とは言えドイツではまだ相当暗いと思われ (かつてドイツで約 4 年の勤務経験のある私にも容易に想像できます)。当日は、早朝 4 時半には起床し、準備をし、その日は 12 人の在宅患者を訪問予定ですが、最初の患者の家には 6 時過ぎには到着します。その日の業務は 5 時間後に終了したとのことですので、午前中には終わったようです。様々な患者宅を訪れますが、一人暮らしの患者宅では当然だと思ふものの、家族と同じ家に住ん

でいる最初の患者宅においても患者の家族の姿が見えないのがちょっと不思議に思いました。6～7年前に我が家で義父が訪問看護を受けていた際、訪問看護師さんが来訪した時には、必ず玄関で応対した家族の誰かに挨拶をしてから義父のところに来ていたからです。おそらく日本ではこれが一般的ではないかと思しますので、今回の放送ではクリスティアーネさんと各患者の家族との接触がないことが私には少し奇異に感じられました。

また、記者である息子ヨナスさんの視点からの回想や観察が興味深いのですが、クリスティアーネさんには同居している夫またはパートナーはいないのでしょうか。離別や死別しているのであれば全く登場しないのは当然ですが、もし、いるのであれば、彼女の仕事に関して彼がどのように見たり、考えたりしているのかについても興味が沸くところです。

この会社のホームページを閲覧したところ、会社のイメージカラーが赤らしく、赤を基調にしたホームページでしたし、看護師の訪問にも赤い色の車を使っているようです。日本の消防車でもわかりますが、「赤」というのは相当目立つ色だと思いますし、車体にはさらに会社のロゴが印刷されているかもしれませんので、地域の人が見ればこの会社の車だとすぐ判別できそうです。ホームページに掲載されている集合写真によりますと、全員が写っていると仮定すると、責任者のヘルマンさんを含めて12人が勤務しているようです。

ところで、ドイツでは1994年に介護保険制度が導入されましたが、クリスティアーネさんが独立して介護サービスの会社を立ち上げたのが同じ1994年でしたので、会社立ち上げは介護保険制度の導入がきっかけになったことが想像できます。その後2020年にヘルマンさんに引き継ぐまでの25年間は会社の運営・管理も行いながら現場で訪問看護師として従事してきましたので、大変な苦勞もしてきただろうと思います。しかしながら、現在は会社の運営・管理からは離れて訪問看護師としての業務、つまり人を助けるという業務に専念できるため、現状に満足している様子です。介護の世話をするだけでなく、話し相手としても患者には喜ばれているようです。訪問看護師として人を助けるというのがまさに彼女の天職なのだろうと思います。彼女のような看護師に介護や世話をされる患者は恵まれていると言えるかもしれません。

また、印象的だったのは、彼女は現在60歳（取材時点）ですが、年齢を重ね彼女自身がいずれ介護を必要とするようになった時には、家族の手ではなく外部の介護サービスを希望すると語っていることです。やはり彼女自身の40年にも亘る経験からそのような思いに至っているのではないかと想像します。その言葉は重いと感じましたし、納得できます。

ところで、現在の病院での看護師の業務に関してクリスティアーネさんはやや批判的に見

ているようですが、看護師の資格がなくともできる業務に関しては補助看護師に委託することはむしろ必要であるように私には感じられます。そうすることにより、本来看護師がなすべきことにより集中できると思われるからです。もしドイツにおいても看護師の労働力不足があるならば、看護助手を活用することはむしろ必要なのではないかと思います。

さて、クリスティアーネさんとヨナスさんを年代別に整理すると、以下のようになるのでしょうか。

- 1962年 クリスティアーネさんが生まれる
- 1980年 18歳?で看護師として職業教育を受ける
- 1982年 20歳?で看護師として病院に勤務する
- 1988年 ヨナスさんの誕生
- 1987年 25歳?で介護サービス会社にて訪問看護師として働く
- 1994年 32歳で自分で立ち上げた介護サービス会社にて会社の運営・管理に携わりながら、自らも訪問看護師として従事する。Jonasさんは6歳。
- 2020年 58歳でかつての上司に運営・管理を継承し、引き続き訪問看護師として働く
- 2022年 60歳のとき今回の取材を受ける

K. K.

2023年8月22日

2023年7月 Nr. 508

さて、今回は「指物職人の遍歴修行」が取り上げられています。

職人になろうとする人は、親方のもとで見習修行をします。大抵、その修行期間は3年続きます。親方の企業での職業教育の不足分は、職業学校での授業により補います。職業学校へは見習い生は大抵、週2回通います。修行・見習期間は職人（になるための）検定審査で終了します。この試験に合格した人は、その親方の企業で雇われることが多いです。

しかしながら、さらに経験を積むためにより良いのは、職人として教えてもらった親方とは別の親方のもとで働くことです。以前は親方検定審査に合格しようと思う人は、多くの職人の職業において、まずは遍歴職人として遍歴修行に行くことが必要でした。今日ではこれはもはや必要ではなくなりましたが、引き続きこれを行う職人もいます。特に大工または指物職人などの木材関連の職業ではそうです。しかしながら、石工または左官などの石材関連職業や仕立屋または帽子職人などの繊維工業の職業においても同じことがいえません。

遍歴職人はその服装だけでなく、布でくるんだ状態の、普通は左肩に携帯している手荷物でわかります。キルシュバウムさん (Herr Kirschbaum) は指物職人です。彼は3年間、遍歴職人として遍歴していました。彼が遍歴職人をしようと思いついたのは、職業学校の級友の一人が遍歴職人をしようという計画を持っていたものの、実行しなかったからでした。彼は、その3年間ずっと、その間ちょっと家に戻りたかったとしても、遍歴のたびを一時中断することは許されませんでした。指物師は皆、家具を製作しますが、どの指物師もこれを少し違うやりかたで行います。従って、他の企業ではどのように作業をしているかをちょっと見ることは彼には興味がありました。

遍歴修行には誰もが行くことができます。ただし、職人（になるための）検定審査に合格した後で、伝統的な職人組合において職人試験合格証を取得済みであることが必要です。しかしながら、2, 3の他の条件も満たす必要があります。それは、気にかけるような財産、たとえば家を所有してはならないとか、結婚していないこと、面倒を見なければならない子供がいないこと、さらには借金をしていないことなど、です。現代のさまざまなコミュニケーションの手段についても、遍歴修行中はずっと、これら無しで済ませなければなりません。

キルシュバウムさんが遍歴修行に行ったとき、12 キロ近い手荷物を持っていましたが、3 ヶ月後、その期間に本当に必要だったものがなにかをよく考えました。そして、無しで済ませることができたものはすべて実家に送り返しました。その結果、彼の手荷物は寝袋、作業着、交換用下着それに衛生用品などとなり、携行荷物は8キロだけになりました。

遍歴職人はその服装ですぐわかります。ドイツ語圏の国々では、その人が遍歴職人であることをほとんど誰もがすぐわかります。そして、多くの人々が、例えば洗濯で援助を申し出ます。ドライバーは、少しの距離なら喜んで彼を車で連れて行きます。しかしながら、普通は遍歴職人の移動手段は徒歩となっています。

キルシュバウムさんも特に夏には、しばしば野宿をしました。戸外でくつろいで横になることは、とても素敵だと思いました。彼はまた街ではしばしば公園で眠りました。ある親方のところで数日間または数週間働いた間は、いつも泊まる場所は確保していました。なぜならば、彼は毎朝、時間通りに仕事を始めなければならなかったからです。

遍歴修行中に遍歴職人は、仕事について尋ねるべき企業に関して多くの推薦をもらいます。彼がちょうどちょっとお金が必要だと感じたときは、しばしば誰かに推薦してもらっていたそのような企業に行き、そこで入り口のベルを鳴らし、仕事があるかどうか尋ねました。

しかしながら、彼はまだ十分お金があるにもかかわらず、仕事について尋ねるということがしばしばありました。それは単に彼がちょっとまた仕事をしていたいと思ったからでした。仕事を得ることは難しくはありませんでした。職人の仕事においてはしばしば若手が不足しているからです。オーストリアにおいてはちょっと屋根ふき職人としても働いたことがありました。その時は高さ30メートルもある、教会の屋根を新しく葺くのを手伝いました・・・。

ところで、今回テーマになっている遍歴職人というのは昔の話だと思っていましたので、現在も尚残っていることを知り、驚き、また興味を持ちました。そして、職人さんがその遍歴修業をするためには、いくつかの条件があることも今回初めて知りました。テキストおよび課題で触れているように、例えば、遍歴職人であることが識別できるような決まった特徴的なものを着用する（しかも業種により色が異なる！）こと、借金をしていないこと、結婚していないことという条件については、まだ何となく納得できます。しかしながら、家などの財産を持っていないことや現代のコミュニケーション手段を使用してはならないという条件には驚きます。特に現代のコミュニケーション手段が使用不可というのは、現代人に不可欠と思われるコンピュータや携帯電話なども使用禁止であることを意味しますので、家族や知人に連絡を取りたい時にはさぞ不便だろうと思います。現代の若者が容

易に受け入れることができる条件だろうか、ちょっと疑問に感じました。この条件が理由で遍歴修業を断念する若者もいるかもしれません。現在ではドイツでも公衆電話ボックスも少なくなっているでしょうから、連絡手段としては手紙ということなのでしょうか。

他にもインターネットでも調べたところ、原則として実家から 50 キロメートルに近づいてはならない（親や兄弟が死亡した場合には 1 日のみ滞在を許される）とか、公共交通機関の利用は不可で徒歩が原則ですが、ヒッチハイクは許されるとか、一カ所の滞在期間は 6 ヶ月以内であることなど、興味深い条件があるようです。加えて、ちょっとドキリとさせられた条件が、ゴールドのイヤリングを身につけることが義務になっている点です。テキスト Nr. 401（2014 年 7 月号 47～50 ページ）の記載によりますと、このイヤリングは身につけていた職人さんが死亡した場合、かつてその埋葬費用に充当したことに起因するとのことでした。

現在では遍歴修業は義務とされていないとのことですが、任意となった現在でもドイツ全土で 700～800 人（資料によって異なります）の遍歴職人がいるようです。ドイツ全土でこの人数ですと、一般の人がドイツを旅行したり、仕事で滞在したりしていても出会う確率は低くそうです。私がドイツに滞在していた頃（1975 年前後および 1986 年～1991 年）にはもっと多くの遍歴職人がいたと想像しますが、当時の私には遍歴職人がどのような服装をしていたかについては全く知識がありませんでしたので、出会っても全く気づかなかったと思います。当時その知識があれば、ひょっとすると出会った時に気がついていただかもしれません。さらに遍歴職人は、ドイツ国内のみならずドイツ国外においても活動しており、中には日本においても活動している人もいるというサイトを見たときは改めて驚きました。

尚、職人遍歴の旅は、2015 年にはユネスコの世界遺産として認定されたとのことでした。

今まで遍歴職人について知識がほとんど無く、ドイツの伝統的な慣習の一つだと思っていましたが、テキスト、課題に取り組んだり、インターネットで検索したりすることにより遍歴職人についてより多く知ることができた現在、遍歴職人がぐんと身近に感じられるようになった気がします。

K. K.

2023年9月30日

2023年8月 Nr. 509

さて、今回は「住宅の新築と改修」が取り上げられています。

多くの人が住みたいと思うところには十分な住宅がありません。新しい居住空間・住居を最も簡単に生み出す方法は、草地や野原だったところに住宅家屋群を建設することです。多くの人にはそのような草地や野原がなくなったら寂しいです。このことは、フランクフルト・アム・マイン市の一市区であるニーダーラート (Niederrad) においても当てはまりました。そこでは空き家になった事務所を見つけ、オフィスビルを住宅用建物に変えました。建設を許される場所は、Gemeinde が決定します。しかしながら、ここでいう Gemeinde というのは、カトリック教徒やプロテスタントとして属しているキリスト教の「教区」を意味する Gemeinde ではなく、市民が属する Gemeinde、つまり「地方自治体」のことです。

ヴァルメロート (Wallmerod) は、21 個の Ortsgemeinde が属している連合自治体です。そのうちの 하나가 1,500 人の住民を抱える Ortsgemeinde のヴァルメロートです。連合自治体全体は 15,000 人から構成されており、一人の市長が統治しています。その市長は CDU の党员です。しかしながら、まるで緑の党の党员であるかのように自然のために尽力しています。彼は、2004 年以来新たな建設地区を指定しないことを達成しました。これは新築禁止のような効果があります。新築は、現存の建築地帯においてのみ可能です。住民数が再び増えることは期待できません。実現可能で最良なことは、毎年ほぼ一定の住民数を維持することです。そしてこれは、その人々が気に入った時のみ達成されます。そこには草原もあることが必要です。

家屋の中には長い間もう誰も住んでいないものもあります。新しい家を建てることは意味がないでしょう。人の住んでいない家屋の所有者たちに市の担当者が相談し、その家屋を売却する気があるか彼らに尋ねます。ある若い夫婦は地方自治体の仲介により古い農家の家屋を購入しました。彼らはこれを現在改修しています。多くの人自身で家を自分の望むように、建てたいと思います。しかしながら、この若い夫妻はそうではありません。彼らは古い家屋にもその魅力があるという点でほぼ一致していました。その上、彼らは家を建てられるような土地を所有していませんでしたし、自分たちの望むような家を建てるだけの土地を買うお金もありません。彼らが購入した家屋には納屋もありますし、その家

屋は広い土地に建てられています。彼らにはこの家は大きな幸運です。

この古い住宅を改修するのは、新しい家を買う場合と比べ、費用は半額くらいですみます。その上、彼らは地方自治体から改修費用補助金として8年を上限として年1,000ユーロを受給できます。これは自治体が彼らに喜んで支出したいお金です。なぜならば、自治体が、人々がそこへ引っ越すために、新築地域（を許可する）証明書を発行するならば、それは自治体にとってずっと高くつくことになるでしょう。というのは、新しい宅地地域においては自治体はまず、そこにひとが行けるよう道路を敷設しなければならないでしょうから。その後、そこに家を建てようとする人のために、水道設備を敷設し、下水設備、電力供給の面倒を見なければなりません。現在改修されている家屋は地域の外れではなく、地域の真ん中にあります。その結果、そこにもう長らく住んでいる比較的高齢な人たちに若者が加わることとなります。若者と高齢者が一緒に生活することが機能するところでは、地域の中心地はより魅力的になり、新しい店舗もオープンします。

ヴィッテンベルゲ（Wittenberge）という街は、1990年以來ようやくドイツ連邦共和国に属することになった連邦州の一つであるブランデンブルク州にあります。1990年にこの街は35,000人の人口がありましたが、2005年には17,000人しかいなくなりました。職場が少なすぎるのです。しかしながら、Gründerzeit〔泡沫会社乱立時代〕からの古い建物がまだありますが、そこには誰も住んでいません。Gründerzeit〔泡沫会社乱立時代〕とは、1871年の普仏戦争におけるドイツのフランスに対する勝利の後の数十年をいいます。・・・

当時フランスはドイツに対して賠償金を支払わなければなりませんでしたが。そしてその結果として、多くの会社が設立されました。当時建設された住居は依然として印象深いものがあります。中には街が所有しているものもあります。20個の住居が2019年に家具が備えつけられ、自由業の人、創業者それにクリエイターの皆さんを対象に入居の公募が行われました。彼らは新しい職場を作り出すかもしれません。彼らはそこに1年間、家賃を支払わずに住むことができました。彼らの内の2,3人はこの年以降もヴィッテンベルゲに引き続き住みました・・・。

さて、今回の放送・課題によりGründerzeitという言葉を知りました。そして、Gründerzeit（Gründerjahreと表現することもあるようです）の日本語の定訳としては、手元の複数の独和辞典だけでなく、インターネット情報からも、そのドイツ語からは想像しにくい「泡沫会社乱立時代」となっていることも知りました。普仏戦争については、遙か昔、高校生の時でしたが「世界史」の授業においてビスマルクの写真が掲載された教科書のページと共に勉強したことは覚えています。ただ、その戦時賠償金を元に多

くの企業がドイツで設立されたことは当時の教科書には記載されていなかったように思います（少なくとも私自身の記憶にはありません）。この日本語の定訳が示すように、その時代には確かに数多くの泡沫会社が乱立したようです。Wikipediaによれば、1871年～1873年の間に 900 を超える会社が設立されたとのこと。資金流入が果たした役割は大きかったと言えます。その一方では、手元の「ドイツ史」（木村靖二編 山川出版 2004 年）には「ドレスデン銀行やゲルゼンキルヒェン鉱業など、のちに指導的企業となっている企業もこの時期に設立されているから、すべての新会社が泡沫的企業であったわけではなかった」という記述がありましたので、この点にも留意しておくべきだと思いましたし、的確な指摘だと思いました。

ところで、ヴァルメロートという自治体において、若い夫婦が古い農家の家屋を行政の仲介により購入したことが紹介されていますが、納得できるものでした。元々この夫婦は古い家屋に魅力を感じていただけでなく、新たに家を建てるだけの資金がないため、その代わりに中古の家屋を改修することを選んだといいます。加えて、改修費用補助金として 8 年を上限として年 1,000 ユーロを受給できるということも彼らには大変魅力的な条件だったと推察されます。一方、自治体にとっても新しい宅地地域を指定すると、そこに人が行くよう道路を敷設したり、上下水道設備を整えたりという基本的なインフラの整備やそれらの維持も行わなければならない、相当な費用が必要となります。これを考えた場合、仲介したり、改修費用補助金を支給したりするほうが費用を低く抑えられると考えたものです。この事業は双方にとってメリットがあるということでしょう。他の事例は紹介されておりませんが、この自治体が事業として進めるからには、当然他にも事例はあるものと思われませんが、どのような事例があるのか知りたいところです。

また、1 年間の期限付きですが、家賃の支払いを受けること無く住居を提供するヴィッテンベルグという街での試みは面白いと感じました。この住居は、元々「泡沫会社乱立時代」に建設され、現在は誰も住んでいないものから 20 個について自治体が家具を備えつけ、特定の職業の人々に住んでもらうという公募をしたというものです。彼らの内の若干名がこの年以降もヴィッテンベルグに引き続き住んだとのこと。この放送がなされたのが 2022 年 11 月ですので、ほぼ 10 ヶ月を経過した現在、この試みがその後どのような状況になっているのか興味が沸きます。また、「泡沫会社乱立時代」の建造物と言え、約 150 年前のものとなりますが、改修をすれば住居として使えることには驚きます。石造りである上に、地震が殆どない地域にとってはそれほど希なものではないかもしれませんが……。

K. K.

2023年10月22日

2023年9月 Nr. 510

さて、今回は「ドイツの生活共同体・地域コミュニティ」が取り上げられています。

地方自治体はそれ自身の行政機関を持つ地域・場です。しかしながら、そのような地域・場については、1月11日および18日の放送においてテーマになっているわけではなく、構成メンバーが自分たちの生活を一緒に形成する生活共同体・地域コミュニティ（以下「地域コミュニティ」とします）がテーマになりました。多くのそのような地域コミュニティはドイツでは1960年代の終わりに発生しました。しばしばそこではまずは構成メンバーが共同で購入した土地だけがあり、次にその土地の上に一緒に住む家を建てました。ドイツではおそらくそのような生活・住居共同体が600ほど存在するでしょう。ひとつの比較的大きな集団においてそのような共同生活を組織することは骨が折れますが、地域コミュニティにおいて生活するつもりの方は、この骨折りを引き受けなければなりません。

すべてを一緒に決定するためにメンバーたち（Kommunarden）は総会に集まります。・・・国会においては、総会は本会議といいます。彼らの総会には、カッセルの近くのツィーレンベルク（Zierenberg）の地域コミュニティである「レーベンスボーゲン」（„Lebensbogen“）に所属している14人のメンバーが週1回集まります。天気の良いときには彼らは庭で椅子に座って車座になります。共同体に関するすべての問題について話し始める前に、皆が椅子から立ち上がり、日常から心理的に距離を取り、その上でそこで自らが形成しているその集団に集中します。

そのあと、とりわけ組織に関することが話題になります。誰が来る週にどの課題を引き受けるかという決定には多くの時間を要しません。それは1時間を大幅に超えることはありません。なぜならば、彼らは互いによく知っているからです。しかしながら、以前は時折非常に長い議論がありました。というのは、すべての決定にすべての人が同意しなければならなかったからです。

地域コミュニティ、「ニーダーカウフungen」（„Niederkaufungen“）においては、比較的長い間の方式において完全に合意することを実施した後で、3つまでの反対意見を無視することで合意しました。しかしながら、それはしばしば3つまでの反対意見が単に無視される結果にはならず、異議を唱えた人が、以前に比べて、変更を提案したり、または何かにより精力を傾けて促進したいと考えたりする人々の立場に対し積極的に同意するようになっています。

問題はすべての決定に際し誰もが発言することになる、すなわちそれにより多くの議論が非常に長く続くということです。しかしながら、すべてについて徹底的に議論を尽くすには、しばしばその時間、能力それに忍耐もまた欠けています。というのは、長時間働いた日には多くの人は疲れ果てていますし、彼らのプライベートの案件も処理したいというからです。

従って、地域コミュニティの中には、議論のテーマを整理し、議論を客観的なものにするための方式を作り出したところもあります。彼らは多くのことを試しにやってみて、失敗もしました。しかしながら、それらを通じて多くのことを学びました。地域コミュニティが機能し得るのは、諸費用を賄うための十分な収入がある場合に限られます。

ツィーレンベルクの地域コミュニティ「レーベンスボーゲン」においては、収入の大部分はその地域コミュニティに属するセミナーハウスから入って来ます。これに、共同体メンバーが共同体外の仕事で稼いだお金が加わります。なぜならば、そのような収入もまた共同の口座・会計に入るからです。

地域コミュニティ「ニーダーカウフンゲン」は、いろいろな収入があります。というのは、共同体メンバーが全日保育園を運営し、認知症の人々のためにデイケアを提供し、家具職人、農場、野菜栽培、会議場などを抱えているからです。これらのすべての収入により共同体は十分やっています。一人当たり、共同体は月に約1,000ユーロ必要です。もし収入がそれ以上になるならば、たまには気前よくすることもできます。

「ニーダーカウフンゲン」においては、一人の女性メンバーががんを患ったことがありました。彼女は住み慣れた環境にとどまることができ、そこで比較的長期間ケアを受けました。彼女の面倒を見たのは、プライベートな関係のあった他のメンバーのみなさんでしたが、ケアを担ったのはコミュニティ全体でした……。

さて、今回話題になっているドイツの地域コミュニティですが、課題や放送で知る限りでは、中々私には具体的に実態を想像することが難しいです。また今まで私自身はそのような地域コミュニティについては聞いたことがありませんでしたので、イメージがわきません。例えば、今回登場する地域共同体「ニーダーカウフンゲン」は、全日保育園を運営し、認知症の人々のためにデイケアを提供し、家具職人、農場、野菜栽培、会議場などを抱えており、それによりいろいろな収入があるとのことですので、多角的に経営しているものの、小規模な企業のようなものが頭に浮かびます。この場合、利益が生まれた場合、税金を納める必要はないのでしょうか。また、法律的にはどのような位置づけの団体になるのでしょうか。加えて、課題および放送によると、そのような地域コミュニティが現

在のドイツでは 600 も存在するということには驚きます。私の知る限り、このような地域コミュニティは日本には存在しないのではないかと思います。

K. K.